

論文審査の要旨

筆頭著者（学位申請者）氏名

中山 由衣

主論文の題目
および

題目 Syncope Unit Plays Important Role in Reducing Syncope Reoccurrence
(失神診療部門は失神の再発を減らすのに重要な役割を果たす)

掲載誌・審査委員名

掲載誌 Japanese Journal of applied physiology (in press)

主査 長谷川 泰弘

副査 柴垣 有吾

副査 太組 一朗

[論文の要旨・価値] 申請者らは失神診療部門を立ちあげ、その診療実態を後方視的に検討することにより、本邦における「失神ユニット」設置の有用性を考察している。対象は、失神診療部門で診療を行った210例（男性56%、平均年齢は57±22歳）で、ガイドラインに準拠した方法で診断治療を行った。半数の患者で入院診療が行われ、76%が35(±53)日で診断に至った。診断に至るまでに平均6回の検査が行われ、頭部CTまたはMRI検査が70%の患者で行われ、侵襲的な検査としては、心臓電気生理学的検査が19%、心臓カテーテル検査が16%、チルト試験が46%に行われた。全体の74%が診断に至り、反射性失神が最も多く（35%）、ついで心原性失神（25%）であった。心原性失神のリスク因子である「65歳以上」、「心電図異常」、「器質的心疾患」、「労作時及び臥位での失神」のうち1つ以上のリスクを持つ失神患者は、リスク因子のないものに比べ、有意に心原性失神が多かった(p=0.03)。平均8か月の経過観察を行ったところ26例が再発し、うち4例が外傷を伴った。植え込み型心電計の拒否等によりガイドライン準拠の診療を行えなかったものが10%存在したが、ガイドライン非準拠診療群は、準拠群より有意に再発率が高かった(p<0.01)。申請者らの失神診療部門における診断確定率は他の研究と比べ遜色はなく、ガイドライン準拠の診療を行う失神専門部門は診断率向上と再発予防に有用と考察し、本邦における失神ユニット配置の効果を考察する上で重要な知見を提供する論文と考えられる。

[審査概要] 審査は主査と副査に2名の陪席者を加えて開催した。PCを用いた約20分の発表は、理解しやすいよう工夫された内容であった。発表後、海外における失神ユニット設置の意味、先行するSEED研究において救命センターの失神部門設置で再発率低下がなかった事実との関連、植え込み型心電計の意義など、本研究および関連領域に関する質疑応答が行われたが、申請者は窮することなく的確に回答することができた。また本研究の限界や将来の展望についても述べ、それらは的確かつ科学性のある妥当なものであった。

最終試験結果の要旨

[研究能力・専門的学識・外国語（英語）試験等の評価] 本研究および関連領域に関しての専門的知識は豊富で、独立した研究者としての研究遂行能力を有すると判断された。審査には真摯な態度で臨み、誠実で礼儀正しく、また将来症例を増やして多変量解析での検討を加えたいと述べるなど、将来性のある人物と考えられた。英語審査は文献の一部をその場で訳させ、十分な英語読解力があることを確認した。以上から申請者の中山由衣君は学位授与に値すると考えられた。